

## 【論文要約】

# 帝国日本の形成と日清・日露戦争における感染症問題

加藤真生

従来、「帝国日本と日清・日露戦争」というテーマでは、欧米列強間の帝国展開に伴って形成された同盟・競合・対立関係と近代日本の動向を関連付け、日清・日露戦争の開戦過程や戦争の結果が持った意味などについて分析が深められてきた。これに対し、本稿では日清・日露戦争における感染症問題の推移を取り上げ、戦争に動員される学知や技術、人材とそれらの由来を検討し、近代日本の戦争遂行を支えた学知や技術をめぐる構造を浮き彫りにすることで、先行研究では取り上げられてこなかった「戦争そのもの」から近代日本の帝国化について考察した。本稿では、特に「帝国と学知」研究の蓄積をふまえ、第一に日清戦争における疾病経験の実相を解明すること（第二部が対応）、第二に明治期を通じた日本陸軍軍医部および軍医の学術的な取り組みの動向を解明すること（第一、第三部が対応）を課題として設定した。第一の課題では、海外の医学史研究の成果をふまえ、疾病史的分析により軍隊と戦地環境の相互関係に留意した疾病流行メカニズムを明らかにすることを目指した。これは、先行研究において軍隊が戦地に及ぼした影響に考慮した疾病分析がなされておらず、日清戦争における疾病経験の実態が十分に解明されていないためである。第二の課題では、海外の医学史研究と日本の軍事社会史研究をふまえ、明治期における日本陸軍軍医部の軍医の質を維持・向上させようとしたシステム（以下、学術進歩体制）の解明とそれをふまえた日清・日露戦間期における日本陸軍軍医部の感染症対策研究の展開を検討した。ここでは、特に日本陸軍軍医部と日本国内外の医療・研究機関および学術組織との関係に留意しながら学術進歩体制と感染症対策研究の展開を追った。

第一部では、明治期における日本陸軍軍医部の学術進歩体制の全体像について検討した。

第一章では、日本陸軍軍医部の学術進歩体制の基本構造について検討した。ここでは、軍医召集事業を中心とした「官ノ事業」と陸軍軍医学会としての取り組みである「篤志ノ事業」に注目した。その結果、日本陸軍軍医部の学術進歩体制とは、「官ノ事業」と「篤志ノ事業」の両輪によって展開した、人やモノを通じた陸軍軍医部内への学知の普及による陸軍軍医全体の学術の維持・向上を目指した体制だったことを明らかにした。また、この学術進歩体制は、日本陸軍軍医部内で完結したものではなく、日本国内の医療・研究機関や学術組織と学術的な回路を構築しながら展開していたことも提示した。

第二章では、日本陸軍軍医部が結んだ国外との学術回路の一つとして、衛生年報・統計の交換ネットワークについて検討した。19世紀後半の欧米では、万国医事会議や万国衛生及びデモグラフィック会議において軍事医療部会が設立され、軍事医学を通じた協調的な学術的枠組みが形成されていた。この枠組みでは、軍事医療統計に関する議論が極めて活発で、

国際的に規格を統一することが目指されていた。一方、日本陸軍軍医部は独自に軍事医療統計を欧米各国陸軍軍医部に対し発信し、相互交換を行う契約を結んだ。また、日本陸軍軍医部の軍事医療統計は評価され、最終的に国際規格統一化の枠組みに招かれることとなった。この間日本陸軍軍医部は、契約締結国とのパイプを通じて、様々な学知を発信しており、それに伴い欧米各国陸軍軍医部からも様々な学知や情報を寄贈されるようになった。

第三章では、日本陸軍軍医部が結んだ国外とのもう一つの学術回路として、清国駐屯軍について検討した。北清事変以降の清国には、列国が駐屯軍を設置していた。各国駐屯軍間では、日常的な交流を重ねており、各国軍医間では学術交流が盛んになされ、医療活動では協力することもあり、共存共栄関係が築かれていた。この結果、日本陸軍軍医部は、清国で実践されていた欧米各国陸軍軍医部の現場の学知や技術を観察することができた。このような実践的学知は第二章のような交流では獲得することができなかった。このため、日本陸軍軍医部は北清事変以降の清国において欧米各国陸軍軍医と学術交流を行うことができたことによって、実践的学知という新たな学知を獲得できる回路を手にすることができた。

第二部では、日清戦争における疾病経験の具体的な実相について検討した。

第四章では、日清戦争における赤痢問題について検討した。日清戦争では、(a)朝鮮半島の都市村落が有する井戸数は日本に比べて少なく、かつ飲用に適した水が獲得できる井戸は更に限られており、日本軍が駐留し、兵士たちの炊事・飲水に活用したことで、都市村落が持つ井戸環境が過度に圧迫され、水が涸渇したこと、(b)夏季という渴きを促進する時期かつ、自然環境から水が得にくい(河水の干上がり)状況であったため、兵士たちが汚水を摂取するに至り軍隊内に赤痢菌が流入した、という飲用水の獲得機会の問題と(c)駐軍により都市村落が過度に尿尿汚染され、ハエの大繁殖という事態につながり、ハエが赤痢菌媒介生物として軍隊へ猛威を振るったという都市村落環境の汚染と菌伝播問題など、(a)～(c)の諸点が組み合わさった結果、赤痢が流行するにいたった。このような問題は冬季においても続いていたが、冬季では都市・村落の家屋が火災によって焼失し、兵士を収容する家屋数が限られていたため、一空間あたりの人口密度が上昇していたことも問題となっていた。

第五章では、日清戦争におけるコレラ問題について検討した。日清戦争におけるコレラは、第一に、海外で購入した貨物船が日本に到着するまでのあいだに、喫水調節タンクの水・砂補充のため寄港したインドで水・砂と同時にコレラ菌も流入し、密閉性の低いタンク内外に菌が流出入して船底に菌が充満していたこと、第二に、貨物船内は兵士の過積載により深刻な水不足に陥っていたため調節タンクを飲用水用のタンクとして代用していたこと、第三に、過積載により船内が暑さ・狭小・臭いの劣悪な環境となり渴きに拍車をかけ、船底汚水や調節タンクの水の飲用を促進させたこと、以上の3点の要素が複雑に交差したことでコ流行にいたった問題だった。

第三部では、第一部、第二部をふまえ、日清・日露戦間期における日本陸軍軍医部の感染症対策の構築過程について検討した。

第六章では、日清・日露戦間期における船舶衛生対策の構築過程について検討した。日露

戦争における船舶衛生対策は日清・日露戦間期において、日清戦争でのコレラ問題をふまえて構築された制度をもとに展開したものであった。しかし、日清戦争期に比べ、日露戦争期における日本の国外疾病情報網の情報伝達速度は格段に上昇しており、実際に船舶衛生対策の場で展開した消毒体制や技術などは、伝染病研究所やドイツの大学で高度な細菌学的知見を獲得した軍医によって編み出されたものであった。つまり、日露戦争において展開した船舶衛生対策は、日清戦争におけるコレラ経験をふまえた日本陸軍軍医部独自の取り組みのみならず、部外の環境変化や部外の施設を活用することで生み出された人材によって成り立っていたのであり、極めてハイブリッドなものだった。

上記のようなハイブリッドな感染症対策は赤痢対策についても同様であった。第七章では、日清戦争における赤痢の根本的な問題であった給水問題に注目し、日清・日露戦間期における給水対策の展開を検討した。日露戦争における赤痢対策は、清国駐屯軍を通じて得た欧米各国陸軍軍医部が現場で実践した技術と東アジアの土着の澄水技術であったミョウバン澄水法、そして伝染病研究所の人脈を通じてもたらされた濾過技術を掛け合わせて成り立っていたものであった。日本陸軍軍医部は、日清戦争における赤痢経験を通じて、戦場での赤痢流行のメカニズム自体は把握していたものの、それに対応する技術を開発することができなかった。しかし、学術回路を通じて部外から技術を取り込むことで、赤痢対策を確立させていた。

以上の検討を通じて、本稿では以下の結論にいたった。近代日本は、帝国主義陣営側に参入するにつれ、列強との政治的摩擦が生じ、同盟・競合・対立関係の中に組み込まれ、戦争につながっていくこととなった。しかし、それと同時に帝国間で形成されていた学術的な枠組みや共存共栄関係にも接近することが可能となり、その恩恵を享受できるようになった。つまり、近代日本は、以上のような帝国間の複雑で相反する関係性に適応し、多様な情報を獲得し軍事に活用することで、戦争を遂行し得たのであり、帝国日本の形成は帝国間の政治的關係に留まらない重層的な関係によって達成されていた。また、日本国内における関係についても、日本陸軍軍医部は部外の医療・研究機関や学術組織と積極的に関係性を構築し、独自の学術進歩体制を築いていた。近代日本の帝国化は日本国内における諸組織と軍隊との円滑な情報交流関係が進展することによっても達成されていったのである。

最後に展望として、第一に近代日本の医学や医療・衛生政策の展開において、軍隊で蓄積された学知がどのような意味をもったのか、第二に 20 世紀以降の軍事医療を通じた国際的な枠組みはどのような変容を遂げ、帝国日本の軍事的展開にどのような影響を及ぼしたのか、という医学史および軍事史に関する新たな研究課題を提示した。